第二講〈論説〉政治論・国際政治論・国家論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

二〇〇一年九月一一日、アメリカ東海岸への同時テロ事件が起こり、崩れ落ちるツイン・タワーの映像が世界中で繰り返し放映された。この事態をきっかけに露出したのは、一般の人々の間にただようある種の不安感である。これは、単に戦争やテロリズムに巻き込まれたらどうしようという不安であろうか。もしそうなら、それは一過性のものであり、（1）忘れるのたとえ通りに、大規模なテロの記憶が薄れるにつれて、日常性が回復されていくことであろう。しかし、そう簡単に事は収まりそうにない。今回、人々は、一瞬にせよ深淵（しんえん）を覗（のぞ）き込んだからである。これまで前提とされていたことの多くが、実は必然でも何でもなく、偶然の上にあることを知ってしまった。もう元には戻れない。このことは、さまざまなレヴェルで言えるが、ここでは政治の組み換えに注目したい。人々が当然と見なしてきた政治的枠組みが、もはやその自明性を失いつつある。政治の意味そのものが変わりかねないのである。

政治とは何かについては、もちろんいろいろな考え方があるが、近代の政治は、境界線によって支えられてきた。地面の上にヴァーチャルな線を引いて、ある領土（テリトリー）を囲い込む。こうした空間的な囲い込みは、単に物理的に空間の利用を限定するにとどまらず、その空間内で起こる出来事についての最終的な決定単位としての主権の観念と結びついてきた。領土を持つ（テリトリアル）国家が、その領土内のすべての事柄について、管轄するものとされたのである。領土内の事柄について、境界線の外部から口を出すことはできないし、境界線の内部に、国家に対抗できる勢力もないというのが、主権の意味である。そして、こうした主権国家が境界線を接してひしめき合うことによって、一種のモザイク状態が生まれ、それによって、管轄されない事柄、決定権力の及ばない領域などはなくなるものと想定されていた。これが、地球を国家（ステート）によって管理するという枠組みにほかならない。

こうした空間的な囲い込みに伴い、もう一つの囲い込みもまた進行した。人間の群れの囲い込みである。特定の人々を国民（ネーション）として囲い込み、それらの人々の運命に特別の関心を寄せることが一般的になった。境界線の内部の群れが大き

くなり、より健康になり、より豊かになることが国益（ナショナル・インタレスト）とされる。そして、国家は国益の守護者としてふるまうというのが、国家理性の観念である。国家理性は、普遍主義的な配慮につながるものではない。むしろそれは、境界線の内部からさまざまな問題やリスクを外部に排出することによって、内部の最適化を図るものである。その意味で、国家理性は本来的に（２）である。政治の目的を、「人が人に対して狼である」自然状態からの離脱に見出したホッブズこそは、近代の政治的な枠組みを最も鮮明に示した人物である。しかし、ある境界線の内部から自然状態を排除することは、境界線の外部との間に自然状態を生み出すことと引き換えであった。国内政治と国際政治は、こうして表裏一体のものとして成立する。

しかしながら、そのように境界線によって内側と外側を区別し、国内政治と国際政治を区別するという手法自体が、今回の事態によって問われることになった。何らかの閉じた全体性（トータリティ）が成り立つとは信じられなくなったのである。境界線はほころんでいるのではないか。そして、内側にいると思っていたらいつの間にか外側にいて、外側のはずが内側になるという状況になっているのではないだろうか。

まず、リスクを「国境線で食い止める」ことができないのではないかという不安が生じている。かつては水際で守っていれば、外国からの攻撃は内側には来ないとされていた。たとえ国境線が侵犯されても、従来の戦争なら、敵が首都に到達するまでには時間があった。空間的な距離が、心理的な安全感覚と連動していたのである。ところが、一連のテロ事件によって、国境線の内側で突然戦闘行為が起こりうることが明らかになった。世界的な覇権国家の中心部がいきなり攻撃されるという事態は、幾重にも緩衝地帯を設ければ内側を守ることができるという確信をうち砕いたのである。さらに、例えば郵便のような日常的な制度が大きなリスクを運びうることも判明した。これは、コンピュータ・ウィルスを用いたサイバー・テロなどと共に、ネットワークでつながった現代社会が、何らかの障壁によって守れないという印象を強めるだろう。

こうした外部に対する不安感は、さらにもう一つの、内部的な不安感と連動する。すなわち、国境の内部に（３）性があるという事実を、多くの人々が不安材料として意識し始めたのである。国家理性は、国民という群れが、基本的に同質的なものであると信じさせようとしてきた。実際には、どんな国民集団も、最初からさまざまな差異を内部に含んでいたのだが、国民国家は、教育を通じて公用語を強制し、国民文化を確立することなどによって、同質性をつくり出したのである。そして、ひとたび一定の同質性が形成されると、それはずっと以前から存在していたかのように考えられる。こうした国民の同質性は、人々が共

存していくための不可欠の条件ではないにもかかわらず、まるでそうであるかのような考え方が力を持っている。さまざまな人々が一緒に暮らしていることは、それ自体として困ったことでも異常なことでもない。しかるに、ある人々によれば、少数民族や移民集団の存在こそが、リスクを増大させる元凶なのである。テロリズムは実際には「われわれ」全てにとっての問題であり、決して特定の集団だけのものではない。オウム真理教のような集団が、いわゆる先進国の、しかも高学歴の人々の中から出て来たことを想起すれば、それは明らかである。しかし、今回のような事件が起こると、「われわれはこんなことはしない。こんなことをするのは彼らだけだ」と、誰かを悪の根源と見なすような考え方が広まる。

こうして、漠たる不安感を背景に、不安をぬぐうための「セキュリティ（安全）の政治」とも言うべきものが前面に出て来る。そこではまず、最近のこの国に見られるように、軍事がにわかに脚光を浴びる。軍隊を派遣して戦争することが、テロ対策として常に有効かどうかははなはだ疑わしい。にもかかわらず戦争が注目されるのはなぜか。それは、戦争が境界線をつくり出すものだからである。戦争は、敵味方がはっきりしていなければできない。誰を守るべきであり、誰を殺してもよいのかがあいまいなところでは、軍隊が動くことはできない。したがって、戦争をするためには、境界線を明確にせざるをえないわけである。逆に、境界線があいまいな時には、軍事的な論理を持ち出すことによって、境界線を確立することができる。境界線の再確認をしたいがために危機を演出する人々さえ出てきかねないのである。

同時に、国境線の内部から「他者」を排除することによって、国境線を内側から回復するという論理もあらわれる。ある種の民族、ある種の宗教の信者、ある種の思想を持つ人々を、「潜在的なテロリスト」と決めつけて排除したり、どこかに収容して規律化したりする。そのことによって、内部の同質性を確保し、セキュリティを確保しようとするわけである。電話や電子メールなどの盗聴、あるいは「個人情報管理」という名の情報統制が、すでに行われつつあるのである。

境界線を守って内部を最適化しようとしているのは誰か。こうした政治が、単に一部の「権力者」の陰謀にとどまらず、国民のかなりの部分によって支持されうるということを意識する必要がある。境界線の政治が支持されてきたのは、生活を守りたいという人々の欲求にそれが合致していたからである。抽象的な理念の実現のために、人々が常に動くとは限らない。しかし、安心して生活できるようにしてほしい、それには多少の権利制限や治安強化は甘受するという「草の根のセキュリティ要求」は、今後身近なところで事件が起きたりすれば、急速に強まりかねないのである。

われわれは、これとは別の考え方を、どこまで示せるだろうか。一つには、セキュリティ要求が、自己破壊的、あるいは自己否定的な側面を持っていることを明確にすべきである。治安対策は、一般の人々には影響しないという考え方が根強い。きわめて（3）な「悪い」連中が排除されるだけだとタカをくくる人が多い。しかし実際には、ある人々が排除されても安心することはできず、今度は残された群れの中から別の人々が排除される。こうして、結局、最後の一人が消滅するまで、社会の中からリスクをゼロにすることはできないのである。こういう粛清の循環が始まったらどうなるのか。実際それに近いことはこれまでも起こりかけたし、決して絵空事ではない。テロを「根絶する」という言葉が含む（4）を意識すべきである。

もう一つ言わなければならないのは、境界線の回復という目的が、そもそも実現不可能であることである。経済的、文化的な結びつきや、人の往来などがますます増える中で、「外からの影響を入れない」、あるいは「他者と接触しないように立てこもる」ことは、とうてい無理である。もはや、どんな政府といえども、重要な事柄について、国境の外部との相談や交渉なしに勝手に決めることはできないし、許されない。例えば、主権国家が、主権があるからといって、自分たちの国民経済を排他的に管理することなどできるだろうか。中央銀行が何を言おうと、外部に開かれている市場はそれに従うとは限らない。経済の規模は、すでに一国の財政・金融政策が管理できる範囲を越えているのである。文化政策についても同じことが言える。国民という単位が前提としてきた、国民の文化的な同質性ももはや限定的なものでしかない。文化は国境を越えて流通しつつあり、それを制約しようとするあらゆる試みは失敗せざるをえない。

要するに、現在の状況は、国内政治と国際政治の間の境界線が維持できなくなって、ややカール・シュミット的な表現をすれば、「内政の外政化」と「外政の内政化」が同時進行しているのである。この事態をどうとらえるか、その認識の仕方が大きな分かれ目になるような気がしている。

（杉田敦『境界線の政治学』による）

注　ヴァーチャル……仮想的
ホッブズ……十七世紀イギリスの政治思想家
カール・シュミット……二十世紀ドイツの法学者、政治学者

問1　空欄（1）に適当な語句を入れ、「一過性」を表すことわざを完成させなさい。

問2　空欄（2）（4）に入るもっとも適当な語をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

（2）A　寛容　B　頑強　C　正統　D　絶対　E　偏狭

（4）A　トータリティ　B　ネットワーク　C　セキュリティ
D　テロリズム　E　リアリティ

問3　空欄（3）に入るもっとも適当な語を漢字二字で答えなさい。（楷書で正確に書くこと）

問4　次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符号で答えなさい。

ア　歴史的に同じ文化を共有してきた地域が国民国家となった。

イ　現代社会では国家内部の同質性を維持することは不可能である。

ウ　国境線を守っていれば安全は確保できるという時代は終わった。

エ　境界線を取り払えば世界における文化と経済の交流が推進される。

オ　国民の側からセキュリティを追求することで、安全が確保される。

第二講　知識モノ解説

文学史・筆者紹介

●筆者　杉田　敦＝すぎた　あつし（一九五九〜）群馬県生まれ。東京大学法学部卒。同大助手、新潟大助教授などを経て法政大学法学部教授。政治学・政治思想史の研究者で日本政治学会理事長なども務めた

語句

自明性＝じめいせい↓説明や証明をするまでもなくわかりきっていること
管轄＝かんかつ↓権限によって下部の組織を支配、運営すること
普遍＝ふへん↓いつでもどこでもあてはまること
覇権＝はけん↓圧倒的な支配権。英語のヘゲモニーやスプレマシー
緩衝＝かんしょう↓衝突の衝撃を和らげること
元凶＝げんきょう↓悪事のおおもと。諸悪の根源
統制＝とうせい↓自由を規制しコントロールすること
甘受＝かんじゅ↓いやなものをしかたないとして受け入れること
タカをくくる＝高を括る↓たいしたことはないと油断する。見くびる
粛清＝しゅくせい↓組織内部の反主流派などを徹底排除すること。政治的な敵を抹殺すること
制約＝せいやく↓縛ること

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

(ア) 厚生労働省の管カツ下に入る　① 括　② 割　③ 轄　④ 活　⑤ 渇

(イ) 相手へのハイ慮を十分にする　① 配　② 俳　③ 杯　④ 拝　⑤ 輩

(ウ) 二酸化炭素のハイ出量を減らす　① 廃　② 灰　③ 排　④ 肺　⑤ 敗

(エ) 権力のハ権争いに巻き込まれる　① 破　② 派　③ 把　④ 波　⑤ 覇

(オ) 緩ショウ地帯で激突を避ける　① 衝　② 賞　③ 渉　④ 傷　⑤ 礁

(カ) 関税ショウ壁で国内産業を守る　① 障　② 章　③ 症　④ 将　⑤ 荘

(キ) 問題の元キョウを指摘する　① 狂　② 恐　③ 教　④ 凶　⑤ 脅

(ク) セン在的な能力を引き出す　① 洗　② 潜　③ 千　④ 先　⑤ 宣

(ケ) 国家的なイン謀を調査する　① 引　② 陰　③ 因　④ 韻　⑤ 淫

(コ) 失敗の辛苦をカン受する　① 勘　② 完　③ 甘　④ 寒　⑤ 敢

第二講　模範解答

問1　喉元過ぎれば熱さを

問2　(2)　E　(4)　D

問3　異質

問4　ア　B　イ　A　ウ　A　エ　B　オ　B

復習問題　第二講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）①
（カ）①　（キ）④　（ク）②　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）管轄　（イ）配慮　（ウ）排出　（エ）覇権　（オ）緩衝地帯
（カ）障壁　（キ）元凶　（ク）潜在　（ケ）陰謀　（コ）甘受